

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

大学記録を更新し 日本のトップレベルを目指す

全日本学生選抜大会・
全日本学生個人選手権大会 69kg級で優勝!

●重量挙げ部・商学部 3年次生
武市 樹 さん



今、体育会重量挙げ部は近年で最も戦力が整っていると言われている。昨年のインカレ(全日本大学対抗選手権大会)では69kg級で武市樹さん、77kg級で白草竜太さんが見事優勝を飾り、他の選手も好成績を取めた。現在2部の団体も、1部昇格を実現させたいところだ。2度の全日本制覇を成し遂げ、その後も快進撃を続けている武市さんに、今年の『全日本学生選抜大会』を目前に話を聞いた。

昨年4月の『全日本学生選抜大会』でスナッチ128kgを挙げ、トータル281kgという自己ベストを更新して優勝。続く5月の『全日本学生個人選手権大会』では、2位に11kgの大

差をつけて優勝を飾り、自身2度目の全日本制覇を成し遂げた武市さん。

重量挙げを始めたのは中学生の頃。家の近くに練習場があり、遊び感覚で習い始めたという。実は当時の指導者が今の橋本建郎監督。関西大学で監督をしながら子どもたちにも教えていたのだ。橋本監督の勧めもあり、武市さんは関西大学のスポーツフロンティア入試を受験することになった。

武市さんは常に自己ベストの重量で練習し、実力をそのまま大会で出す。「僕は練習より試合の方が強い。練習で出したことのない重量が試合で出せるんです」。普段から欠かさないのは、台の上にバーベルを乗せ、腰の位置から鎖骨周辺まで反動により浮かす筋トレ。「この部分が自分の一番強いところ。弱点の強化はあたり前、強いところを更に強化するのが監督の方針です」

減量は試合の1週間程前から始める。徐々にカロリーを抑え、2日前からほとんど食べず、前日は飲まず食わずの状態となる。体重をじわじわ落とすと筋力も落ち、その期間の練習量も減るため、体重だけを一気に落とし、筋力は維持するのだ。「ここが勝負の分かれ目。体重が落ち過ぎた時の試合は調子が悪いんです」。減量の仕方によって試合結果もかなり変わってくるという。

次の試合は4月の『全日本学生選抜大会』。「最低限でも優勝が目標。前回よりも良い記録を出し、2位に差をつけて勝ちたい。スナッチを8kgのばして、136kgの大学記録を狙います」と、勝者ならではの強気な姿勢を崩さない。



武市 樹—たけいちいつき
■1987(昭和62)年大阪府生まれ。大阪産業大学附属高校卒業。商学部3年次生。

そんな武市さんだが、今はスランプだという。ジュニア日本記録を更新した2007年の『関西学生選手権大会』で絶好調を経験。低調期との違いを聞くと「調子の悪い時は、6回挙げ終わったときにここが限界だろうと思う。調子の良い時は、あともう1回挙げたらまた新しい記録を出せるという自信があるんです」。今は瞬発力を養うため、苦手なダッシュなどを積極的に練習へ取り入れている。「優勝が続くと、次も優勝しなければというプレッシャーと責任を感じます。でも、自分は優勝できると自信を持って練習していくしかない。せめてあともう一回、少しでも長く、少しでも多く練習しておこうと思います」

現在、部員は男女12名と留学生1名。武市さんと同じく昨年のインカレ・77kg級で優勝を決めた1年次生の白草さんは、中学時代から共にがんばってきた仲間であり、強力なライバルでもある。「彼とは階級が違うけど、一番負けたくない。悪いところを指摘し合い、調子が悪い時は相談もできる」。スポーツ自体は個人戦だが、大学の試合は団体戦もある。4月からは新しい部員も増える。「今の課題は気力面です。最近、部員数が急激に増えているので、しっかりしなくてはと思います。そして、一人ひとりがもっと記録を伸ばす。皆一緒に練習はできるけど、皆で集まりキャプテンがひっぱって、気合いの入った雰囲気の中で練習をしていくことが大切だと思います」

番組作りの重点は“生活者目線”

視聴者の本当に知りたい情報を伝えたい

●フリーアナウンサー
宮根 誠司 さん —経済学部 1987年卒業—

ウイークデーの朝、そして昼下がり。
巷にあふれる最新情報を幅広く紹介する一方、時に政治や経済、
社会の抱える諸問題について鋭く斬り込む宮根誠司さん。
ノリのいいトークと人懐っこい笑顔だけではない、
人を惹きつけてやまない魅力とは…?
その源流に迫るべくお話を伺った。

「学生時代の下宿は、風呂もトイレも共同。でも、仲間と日替わり当番でご飯を作ったり、部屋で仲間と遊んだり、朝まで語ったり、先輩に授業のノートを貸してもらったりね。それはもう楽しかったですよ」と、懐かしそうに振り返る宮根誠司さん。卒論のテーマに「企業買収」を選んだと聞き、さぞかし学生時代からマスコミ志向が強かったのだろうと思いきや、放送局の入社試験を受けたのは、ほんの偶然からだったようだ。「就職活動中、ふと立ち寄った就職課の掲示板に『朝日放送』の名前を見つけたんです。その頃は『ラブアタック』や『プロポーズ大作戦』などの番組が全盛期だったので、見学がてらちょっと行ってみ



よう」と(笑)。面接で、どんな仕事かといふと問われ「何でもいいです」と、答えたところ、なぜかアナウンサーとして採用されたのだとか。だが「なにしろ基礎知識がまったくなかったものですから。標準語はしゃべれないし、『鼻濁音』って言われても意味がわからない。かなり苦労しましたよ」

そんな宮根さんに転機は突然訪れた。「ある時、『おはよう朝日です』の生中継のレポーターとして急ぎょ出演することになったんです。その時、何にも仕事なかったのは僕だけだったからなんですけどね(笑)」。1回きりだと聞き直り、「台本を無視して、結構好き勝手なことしたんです(笑)」。すると、それが「おもしろい!」と、評判になり、以後レギュラーに。やがて同番組の単独司会を務めるなど、まさに朝日放送の「顔」となった。

そして2004年、フリーアナウンサーとして新しい道を歩み出す決意をした宮根さんは、社長のもとへ。普通なら直属の上司と相談するところだろうが…「実は、社長(現・取締役相談役)の西村嘉郎さんは関大の先輩。朝日放送には『関大会』という校友組織があって、そこで何度もお会いしていた。だからこそ自分の思いを直に伝えたかったんです」。その熱意に社長も退社を快諾。



宮根 誠司—みやね せいじ
■1963(昭和38)年、島根県出身。87年、朝日放送株式会社入社。90年から長寿番組「おはよう朝日です」に出演。94年には司会を務める。04年、朝日放送を退社し、フリーに。「おはよう…」のほか「情報ライブ ミヤネ屋」(読売テレビ)などに出演。趣味はマラソン、ゴルフ。過去2回フルマラソンを完走し、番組の合間などに10~20km走っている。

自らみんなに働きかけて激励会まで催して送り出してくれた。とはいえ「同じ放送局でも会社が違えば、局内の機構はもちろん、物事に対するアクセスの仕方もまったく違いますから」。最初は戸惑うことも多かった、という宮根さん。その状況から救ってくれたのは、ここでも関大の先輩だった。「読売テレビでの初仕事の時、解説委員の春川正明さんが『僕も関大やねん!』と、声を掛けてくれて。本当に心強かったですよ」。関大OBならではの絆の強さ、ありがたさを折に触れて感じているようだ。現在は、局アナ時代から継続している「おはよう朝日です」、08年から全国放送になった「情報ライブ ミヤネ屋」と、平日の帯番組を2本も抱えるなど、その活躍ぶりは、すでに周知の通り。そんな宮根さんが、番組作りの姿勢としてもっとも大事にしているのは「生活者目線」だ。「最近は何かと情報過多ですよ。ややもすると自分たちも新聞や雑誌を読みあさって、情報をたくさん伝えようとしがちですけど、そうすることで視聴者の方との感覚が逆にズレてしまう気がするんです」。自らも生活者の一人としての意識を持ち続けることで、視聴者が知りたいことを敏感にとらえ、厳選した情報を伝えていきたいと話す。刻々と移りゆく社会の情勢。現在、そこに明るい材料は決して多くはない。しかし宮根さんは後輩たちに、こうエールを送る。「こんな時こそ敢えて大胆な挑戦をしてほしいですね。大学の知名度も高くて『いいポジション』にいるからかもしれませんが、関大生はチャレンジ精神がやや足りないように思うんです。就職活動も臆せず自信を持って。どんな世界に飛び込んでも、そこで活躍している関大の先輩たちが、きっと力になってくれますから」